



## アフマド・ハティープについての試論

佐藤 卓巳 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士後期課程

## 一 はじめに

本稿の目的は、クウェート国民議会において長期にわたり活躍し、アラブ民族主義者としても知られているクウェート政治家、アフマド・ムハンマド・ハティープ (Ahmad Muhammad al-Khatib<sup>(1)</sup>) について紹介することにある。より具体的には、一九二八年のハティープの出生から、クウェート国憲法を制定した一九六二年の制憲議会直前までの期間を対象に、彼の政治活動の一端を明らかにする。本稿においてこの期間のハティープについて紹介する理由は、次の二点にある。

第一に、クウェートの政治史におけるアラブ民族主義勢力の役割についての関心である。クウェート大学政治学部のアブドゥッラー・シャイジー (Abd Allah al-Shayfi) は、一九六二年に制度設計されたクウェートの議会制度は、「クウェート・モデル (al-Namūdaj al-Kuwaytī)」として、同時代の中東地域において革新的な位置づけにあったと指摘する。そして彼は、その理由を、独裁的な政治体制が所与のものとされていた一九六〇年代の中東地域において、クウェートの議会制度が国民に対して広範な政治的権利を与えたからであると説明する<sup>(2)</sup>。

これまでの先行研究は、「クウェート・モデル」がこのような時代・地理的制約にもかかわらず成立した点について、国外および国内的要因に着目して構造的に説明してきた<sup>(3)</sup>。とくに後者の研究は、この議会制度の設立を、クウェートにおける伝統的な政治主体であるサバーハ家 (al-Sabah) (首長家) と商人階層とのあいだの、政治および経済的な利権をめぐるひとつの「契約」として説明する傾向にあった。しかしクウェート国憲法を制定した

制憲議会 (al-Majlis al-Ta'sisi) や、それに付随する憲法委員会 (Lajna al-Dustur) の議事録を精査すると、以上の通説とは異なる事実を確認することができる。すなわち、国民に広範な政治的権利を与える「クウェート・モデル」の制度設計において、首長家と商人階層に加え、ハティープを中心としたアラブ民族主義勢力が無視できない役割を果たしていたことがわかるのである<sup>(4)</sup>。そのため本稿において、制憲議会が開催される一九六二年までのハティープの政治活動について紹介することは、「クウェート・モデル」の構築過程と、それ以降の同国における議会政治の展開を再検討するうえで、ひとつの重要な作業として位置づけることができるのである<sup>(5)</sup>。

第二に、湾岸アラブ諸国における知識人の個人史についての関心である<sup>(6)</sup>。これまで、湾岸アラブ諸国の政治活動家や知識人を対象とした、政治および社会思想的な研究は十分に行われてこなかった。しかしこのことは、この地域において主だった政治活動家や知識人が不在であることを意味するものではない。後述するとおり、ハティープはクウェートにおいて数々の政治・文化団体を設立し、それら諸団体が発行する刊行物をつうじて、国外に対しては、アラブ諸国の統一や欧米諸国による植民地主義的活動の停止を、そして国内に対しては、一般民衆の政治参加や労働者の権利の向上を主張してきた。これら刊行物は、クウェート、湾岸アラブ諸国、中東全域、パレスチナ/イスラエル問題、そしてこれら事象をめぐる国際政治の動向について、首長家に支配された体制の側ではなく、権力構造のなかで周辺に置かれた存在の理解を記す、数少ない資料のひとつである。しかしこれら刊行物の所在は確認されているのにもかかわらず、それを対象とした考察は、これまで十分に行われていない。

文化人類学者のロングヴァ (Anh Nga Longva) は、湾岸アラブ諸国を対象

としたこれまでの研究が、「大きな歴史的イベント」や「大きな構造」に着目する傾向にあり、それらが地域の支配階層とは区別された一般の人々によって、どのように理解、もしくは経験されたのかについて、十分な関心を示してはこなかったと批判する。彼女自身は、「国籍に基づくエスノクラシー(civic ethnicity)」の概念を用いてこの課題の克服に取りくむものの、実際はまだ抽象的な議論の枠を出ていない<sup>9)</sup>。確かに、ハティープを中心としたクウェートのアラブ民族主義者達を「一般の人々」として扱うことについては、まだまだ議論の余地がある。しかし彼らは、サバーハ家が統治する君主国クウェートの政治領域において、まぎれもなく周辺の存在であり、彼らが周囲の環境をどのように理解、もしくは経験していたのかについて、上述の刊行物をおして考察することは、ロングヴァが述べる研究課題に取りくむための、ひとつの有効な手段となりえよう。そしてこのことは、国民国家という制度が徐々に構築・強化されつつあるなか、この地域の一人人が、圧倒的に影響力のあるこの非人格的な主体とどのように関係を取りむすび、そのなかでいかに自らを位置づけようとしたのかという問いに対して、ひとつの答えを提示することにつながるのである。

本稿では、以上の二つの問題意識に取りくむための序論として、クウェート人アラブ民族主義者アフマド・ハティープについて、一九二八年の出生から、制憲議会が設立された一九六二年直前までの期間における、彼の政治活動を中心に紹介したい。なおハティープの半生を描くにあたり、以下の議論では、二〇〇七年に発行された彼自身による自伝の第一巻『クウェート…首長国から国家へ (al-Kuwayt min al-Imāra ilā al-Dawla)』と、英国外交書簡集 (Cambridge Archive Editions) を主な一次資料として利用する<sup>10)</sup>。

## 二 少年ハティープ

本稿の主役であるアフマド・ハティープは、一九二八年、クウェートのドゥフラ (al-Duhla) 地区において、父ムハンマド・ハティープ (Muhammad al-Khatib) と、その第二妻ワドゥハ・イブラーヒーム・ハビーズイー (Wadhā Ibrahim al-Khabīzī) の第四子として誕生した。兄弟は全員で五人であり、兄が一人、姉が二人、そして妹が一人であった。

石油収入によって都市開発が進む一九五〇年代以前のクウェートは、町の一方をペルシャ湾に面し、内陸の砂漠に面するもう一方を六キロほどの半円

形の城壁に囲まれた、小さな港町であった。城壁の内側は、いくつもの地区 (hays, furayj) によって分かれており、各地区の居住者は、経済的な階層や祖先の出身地、そして宗派などによって分類される傾向にあった。とくに経済的な階層に基づく住みわけは明確であり、海岸に面するシャルク (Sharq) 地区とキブラ (al-Qibla) 地区には、真珠採取業や造船業、そして貿易業に携わることで巨額の資本を蓄積し、政治的にも経済的にも当時のクウェートの中枢に近い商人階層が居住していた<sup>11)</sup>。一方で当時のクウェートには、商人階層が営む上述の事業に雇用される、多くの労働者が存在していた。クウェート社会において「最下層」として位置づけられていたこの階層は、非常に苦しい生活を送っており、彼らは商人階層が居住する海岸部とは離れた、城壁内の砂漠側の土地に住んでいた<sup>12)</sup>。

この町の中央部には、サファート (al-Safat) と呼ばれる広場があった。クウェートの歴史学者サイフ・マルズーク・シャムラン (Sayf Marzuq al-Shamlan) は、サファート広場を当時のクウェートの「心臓部 (al-Qalb)」として形容しているが、この広場には城壁の外側からやってくる遊牧民 (Badw) が家畜や羊毛を販売する市場や<sup>13)</sup>、城壁内外へ向けた交通手段の発着場が立地していた。サファート広場には、城壁内の住人が好んで集まる茶屋や日用品を販売する小さな店舗も集中しており、犠牲祭などでは祭が催され、時の首長も町民と交流するためにやってくるなど、港町の憩いの場として機能していた<sup>14)</sup>。

ハティープの言葉によれば、この広場に隣接するドゥフラ地区は、海岸部に面しているシャルク地区やキブラ地区とは異なり、物品運搬業者や店舗経営者、そして労働者が居住する下層階級地区であった<sup>15)</sup>。アラブ民族主義者運動について研究し、自身もその活動に身を投じたカズズイーハ (Wald Kazzīha) によれば、ハティープ家は「大きな財産や社会的地位を全く有さない一族」であったという。また一九六〇年代の英国外交書簡も、ハティープ家については「下賤 (of low birth)」の身分と形容している<sup>16)</sup>。ハティープ自身の説明によれば、父ムハンマドと、母ワドゥハの父イブラーヒーム・ハビーズイー (Ibrahim al-Khabīzī) は、サバーハ家が行う対外戦争や商隊の保護に従軍する兵士であり、数多くの戦闘に参加していた。とくに祖父イブラーヒームは、現代サウジアラビアの建国の父アブドゥルアズィーズ (Abd al-Azīz) のリヤド奪還に参加した戦士であった。ハティープ家の生計は、父と祖父が戦闘や商隊の保護に従軍することで得る賃金と、一家が保有する

不動産の賃貸金によって成りたっており、彼らの生活は同地区のほかの住民よりも多少は豊かであったという<sup>15)</sup>。

しかしハティーブ家の生活は、父が一九一〇年の「ハディーヤの戦い (Ma'raka Hadhya)」で障害を負ったことで、暗転してしまう。なぜなら、彼らはもはや武器を持つことができなくなってしまったために、首長家からの給与が削減されてしまったからである<sup>16)</sup>。ハティーブの兄イカーブ (Iqab) は、給与を元の水準に戻すよう首長家に陳情するものの、聞き入れられることはなかった。またアブドゥルアズィーズが、リヤド奪還に従軍したクウェートの住民を一九二〇年代に慰問した際に、祖父イブラーヒームが一家の苦しい生活状況について言及したため、時のクウェートの首長アフマド・ジャービル (Ahmad al-Jabir) (第一〇代：在位一九二一～五〇) が激怒してしまい、以後イブラーヒームは、サウード家から毎年与えられていた給付金を受領することを禁じられてしまう。母ワドゥハは、不動産の売却と日用品の転売によって、子どもたちと障害を持った夫のために生活の糧を確保しなければならなくなってしまうが、そこで得た賃金は、一家の日々の生活を維持するのにやつとの水準であった。ハティーブ自身も、幼少時代に内職を行い、小金を稼ぐ必要があったこと、また家計の状況から、時により十分な食事をとることができなかったことを自伝で回想している<sup>17)</sup>。

ある年に、家庭の経済状況から、ハティーブと兄のイカーブは、学業を断念するよう母に告げられてしまう。しかし両者は、文教委員会 (Majlis al-Ma'arif) のメンバーであったユースフ・イブン・イーサー・ギナーイー (Yusuf Ibn 'Isa al-Qinā'i) を訪れ、二人が学業を継続することができるよう嘆願した<sup>18)</sup>。結果、同委員会は両者の学費を負担することを決定し、ハティーブは一四歳までクウェートで教育を受けることができるようになった<sup>19)</sup>。その学校生活をとおして、ハティーブは、世の中における経済格差の存在を初めて実感し、政治的な意識に目覚めたという。例えばここでは、キブラ地区やシャルク地区からの裕福な子どもたちが在籍する一方で、下層階級からの子どもたちも数多く在籍していたという。また当時のクウェートでは、パレスチナ人が教師として雇用されており、ハティーブは彼らをとおり、民族主義的な感情 (al-Shu'ūr al-Qawmiyya) を獲得しはじめたという<sup>20)</sup>。

そんなある日、十歳のハティーブ少年が通っていた学校に一人の男性が来て、大声で演説をして帰って行った。また別の日、彼は学校帰りのサファート広場において、クウェートの町民には見慣れない、長髪で胸をはだけた格

好をした男たちによって、血だらけの男性が磔刑にされている「恐怖と嫌悪を掻きたてる」現場に遭遇した<sup>21)</sup>。ハティーブ少年が目撃したものは何であったのだろうか。彼が目撃したこの光景を理解するためには、当時のクウェートにおける政治状況について説明する必要がある。

### 三 一九三〇年代のクウェートにおける政治状況

一八九九年より英国の保護領下にあったクウェートは、一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、未曾有の経済不況に直面していた。そこには、サウジアラビアとの関係悪化にともなう相互の通商活動の断絶、日本企業による養殖真珠の製造・販売の開始、そして世界恐慌という、三つの要因が存在した。そしてクウェート内では、商店の倒産、住民の貧困化、行政における汚職が蔓延し、一方で首長家であるサバーハ家は、権力と資本の独占化を進めていた。そのため、有力な商人階級のあいだにおいて、サバーハ家に対する不満が徐々に醸成されている状況にあった<sup>22)</sup>。

そのような状況を背景に、一九三〇年代初頭、国内の開明的な商人一二名によって、「国民党派 (al-Kutla al-Wataniyya)」が設立された。設立者のなかには、後に制憲議会に参加するアブドゥルアズィーズ・ハマド・サグル (Abd al-'Aziz Hamad al-Saghr) とアブドゥルラティーフ・スナイヤーン・ガニム (Abd al-Latif Thunayyan al-Ghanim) という二人の青年がいた。彼らは、一九二〇年代にバグダードとダマスカスでアラブ民族主義者と親交を深めており、帰国後にはパレスチナの抵抗運動指導者をクウェートへ招待して支援活動を行うなど、多くの民族主義的活動に従事していた<sup>23)</sup>。また国民党派は、自由選挙によって立法議会を設立することを目指しており、イラクの新聞をとおしてクウェート内の行政改革とアラブ地域の連帯を訴えていた<sup>24)</sup>。この党派は、「国民青年党派 (Kutla al-Shabab al-Wataniyya)」(一九三八年設立) という実践部隊を有しており、その書記長にはアフマド・ザイド・サルハーン (Ahmad Zayd al-Sarhan) という商人階層出自の人物が就任していた<sup>25)</sup>。

商人階層のあいだにこのような民族主義的な動きがあること、また英国が体制の安定化を目的として限定的な行政改革を求めたことから、時の首長であるアフマド・ジャービルは、一九三八年に立法議会 (al-Majlis al-Tashri'i) の設立を容認した。同年六月に実施された議会選挙では、スナイヤーン・

ガーニムを中心に、国民会派所属メンバーとその支援者を含めた計一四名が当選した。その際、議員によって議長職に選任されたのが、商人階層と親密な関係を築いており、なおかつ首長家内部において比較的リベラルな政治的姿勢を有していた、後に第一代首長（在位一九五〇～六五）に就任するアブドゥッラー・サーリム（Abd Allah al-Salim）であった<sup>26</sup>。

しかしながら、湾岸地域で最初の試みとなる近代的な議会制度は、短命に終わってしまった。なぜなら立法議会は、数々の法制度を制定することで、立法および行政に関する首長家の権限を大きく制限してしまったからである。またさらに、これら法制度は商人階層の利益を反映してクウェート経済の自由化を促し、結果としてクウェートの外交活動に影響をおよぼしはじめたため、アフマド首長と英国はこれを脅威として捉えた。そのため、首長は英国の容認のもと議会を解散し、一九三八年二月に第二回選挙を実施したが、この選挙も国民会派とその支援者が圧勝した。首長は、立法議会の決議に対する拒否権を自らに与えようとしたが、立法議会在この要求を拒否したため、彼は議会を強制的に解散する。国民青年会派は、立法議会の防衛を目的として集会やデモを組織するものの、首長は自らの影響下にある遊牧民を動員してこれを弾圧する<sup>27</sup>。幼いころのハティープが学校やサファート広場で目撃したあの光景は、まさにこの政治変動の一部であった。そして彼が表現したところの、町の住民にとって見慣れない格好の男たちとは、この議会運動を弾圧するために、首長が動員した遊牧民たちであったのである。

結局この立法議会運動は、スナイヤーン・ガーニムを含む数名が数年間にわたって逮捕され、残りのメンバーが国外へ亡命することで失敗してしまふ。また商人階層を率いてアフマド首長に対峙したサーリムは、サバーハ家内の競争——サーリム系とジャービル系——という要因もあり、暫くのあいだ統治の権限から疎外されてしまふ<sup>28</sup>。結果として、サーリムが首長位に就任する一九五〇年まで、クウェートでは、首長家による専制的支配に特徴づけられる、「政治的冰河期（al-Jumūd al-Siyāsī）」が続く<sup>29</sup>。

## 四 ベイルート時代

クウェート時代、ハティープ少年の学校における成績は常にトップ水準にあった。そのため、彼は政府の奨学生に選ばれ、一九四二年よりベイルート・アメリカン大学（American University of Beirut: AUB）付属高校に留学す

る。そして同校を二年四ヶ月で卒業した後、AUBの医学部に入学する。その後、彼は、同学部を卒業する一九五二年まで、計一〇年間をレバノンで過ごすこととなる。ハティープは、自身のレバノンにおける時間を、自らの「人生と思考方法に大きな影響」を与えた「最も美しい」期間であると形容している<sup>30</sup>。

ハティープによれば、AUB付属高校時代において、彼の政治的な関心は主にクウェートの事象に限定されていたという。例えば彼は、この期間に、エジプト在留のクウェート人留学生と協力して、クウェートで文学クラブを設立しようと試みている。このクラブは、文化活動をおしてクウェート内の若者を教育することを目的としたものである。この計画は、諸々の理由から頓挫してしまうものの、この過程において彼は、一九三八年の立法議会運動に参加し、当時レバノンに亡命していたハーリド・アドサーニー（Khalid al-Adsemi）と親交を深めることとなる。アドサーニーとは、ハティープが十歳の頃に小学校で目撃した、あの演説者である<sup>31</sup>。アドサーニーは、ハティープを含めたクウェート人留学生を、時により昼食に招待していた。ハティープによれば、アドサーニーとのベイルートにおける交流は、彼がクウェートの政治問題に対して関心を持つ直接的な契機となったという<sup>32</sup>。

一方でAUB時代におけるハティープの関心は、クウェートの政治問題から、中東アラブ世界全域へと拡大した。その要因としては、当時AUBで歴史学を教授しており、民族主義的な思想を有していたダマスカス出身のクスタンティーン・ズライク（Qustantīn Zurayq）が率いる協会、「固き絆（Jam'ya al-Urwa al-Wuḥḡā）」（以下「絆」）に参加した点を指摘することができる<sup>33</sup>。ハティープによれば、当時ズライクは、学生の「民族意識（al-Wa'y al-Qawmī）」を鼓舞するために諸々の活動を組織しており、「絆」もそのひとつであったという<sup>34</sup>。しかしハティープの経歴との関連で最も重要なことは、彼はこの協会の活動をとおり、当時AUBの医学生であったジョルジュ・ハバシュ（Jūrj Habash）とワディーウ・ハッダード（Wādī' Haddad）、そして政治学を専攻していたハーニー・ヒンディー（Hani al-Hindi）らと親交を深めることができた点にある。ハバシュとハッダードは、後にパレスチナ解放人民戦線（Popular Front for the Liberation of Palestine: PFLP）を設立するパレスチナ人であり、ヒンディーは、後にアラブ連合共和国の閣僚を務めることとなるシリア人であった<sup>35</sup>。

ハティープによれば、当初「絆」の活動は文化的側面に限定されていたと

いうが、国連による一九四七年のパレスチナ分割決議と、翌一九四八年の「ナクバ (al-Nakba)」をへて、彼らの活動は政治的なものと移行したとい<sup>46)</sup>。とくにナクバに際しては、ハティーブはともに勉強に励んできたパレスチナ人の学友が一夜にして難民となる姿を目の当たりにし、彼らとともに毎日国境へ出向き、家族の安否を確認する手助けをしている。また彼らは、医者としての、難民キャンプにおいてパレスチナ難民の健康診断を行っており、難民の悲惨な状況を「自らの目で目撃し、自らの手で触れた」ことで、「シオニストとそれを支援した諸国家、そしてパレスチナ人を見捨てたアラブ諸国政府と各政党に対し、悲しみと怒りを感じる」ようになったという<sup>47)</sup>。ハティーブらの「絆」における活動は、一九五一年前後を境に「アラブ民族主義者運動 (Haraka al-Qawmiyyin al-'Arab/ANM)」とよばれる一連の民族主義運動として再編されるのであるが<sup>48)</sup>、ANMが掲げる「統一、解放、復讐 (Wahda, Tahri, Thawr)」という活動スローガンに「復讐」という文字が含まれていることについては、創設者たちのこのような個人的な経験をもふまえないと容易に理解することができないであろう。

ではハティーブらは、「絆」もしくはANMをとおり、具体的にどのような政治活動に従事したのであろうか。カズズィーハによれば、彼らの政治活動の最優先事項は、後にも先にも「パレスチナ問題」の解決であったという。この点については、彼らの活動が文化活動から政治活動に移行した理由を、パレスチナ問題を「アラブ全体の最重要課題」と位置づける自分たちの信念に基づいている、と説明したハティーブの発言からも、ある程度想定することができ<sup>49)</sup>。そんな彼らの活動は、政治的なパンフレットの配布や、ストライキおよびデモの組織が中心であった。例えば彼らは、当時のレバノン政府の高官を招待した政治集会や、イスラエル支援国製品のボイコット運動などを組織した。また、パレスチナ問題についての新聞への寄稿、新入生歓迎会などにおけるオルグ活動、そして知識を蓄えるための読書——ハバシユは、ハティーブに対してメディアやプロパガンダに関する本を精読するように提案し、ハティーブはそれに応えていた——や格闘技を学ぶことも、重要な活動の一環であった。

とくにイスラエル支援国製品のボイコット運動は、アリー・ナスイルツディーン (‘Alī Nāsīr al-Dīn) と親交を深めたことを契機として、AUBの学内を越えたレバノン全土の学生へと広がった。アリー・ナスイルツディーンとは、フランス植民地主義に対する批判活動を一九三〇年代に展開した

「民族行動連盟 (‘Uṣṣa al-Amal al-Qawmi)」の理事であり、『アラブ問題 (Qaḥṭā al-'Arab)』の著者である。当然ながら、このような活動は治安当局を警戒させることとなり、AUBの学生と治安当局とのあいだの衝突を原因として、大学当局は、最終学年に在籍していたハティーブとハッダードの退学処分を決定する。しかしながら、この決定はレバノン全土の学生運動の反対にあい、すぐに撤回されてしま<sup>49)</sup>。

ハティーブは一九五二年にAUBを卒業し、クウェートに帰国した<sup>49)</sup>。ハティーブが多感な十代から二〇代にかけての時期に従事した政治活動や、それをおして親交を深めた個性的な顔ぶれを眺めただけでも、レバノンにおける経験が、自らの人生と思考方法に大きな影響を与えたと述べる彼の先の発言を、容易に理解することができよう。またこの期間に彼が実践した政治活動——集会やデモの組織、ビラ作成・配布、オルグ活動など——が、クウェート帰国後に彼の従事することとなる様々な活動に活かされたと思定することも、恐らく間違っていない。実際ハティーブは、議論の方法や、立場を異にする者の見解に耳を傾ける作法を学べたことが、ベイルート時代において、最も重要な経験であったと発言している<sup>49)</sup>。また経済的階層の違いから、クウェート内では知りあうはずもなかった商人階層の子弟とレバノンにおいて親交を深めることができたことが、帰国後の彼の政治活動に大きく貢献することになったとも述べている<sup>49)</sup>。

## 五 一九五〇年代——ANMクウェート

一九五〇年代のクウェートは、一九五〇年に首長位に就任したアブドゥッラー・サーリムの治世下であり、アフマド前首長の時代と比較して、国内社会は非常にリベラルな政治的風潮を享受していた<sup>49)</sup>。一九五二年にAUBの医学部を卒業し、クウェートへ帰国したハティーブは、国立病院において医療活動に従事するかたわ<sup>49)</sup>、この政治的緩和を最大限に利用することで、同国におけるアラブ民族主義者運動（以下ANMクウェート）の活動基盤を構築しはじめる。そして翌年からいくつもの政治・文化団体を設立し、その活動をおしてクウェート人の政治意識改革に注力した<sup>49)</sup>。これら諸団体は、ANMクウェートの活動を効率的に遂行することを目的として、一九五五年に「クウェート・クラブ委員会 (Lajna al-Andiya al-Kuwayṭiyya)」の傘下に入り、活動方針が統合される<sup>49)</sup>。

ハティープ自身も述べているとおり、この時期のANMクウェートの活動の主な目的は、①クウェートの英国植民地主義からの独立と、②一般民衆による政治参加の二つであり、彼らの活動はその実現を目的として展開していた<sup>48</sup>。ここでは紙幅の関係から、一般民衆による政治参加を目指したANMクウェートの活動についてのみ紹介する。

ANMクウェートのこの活動は、大きく二つに分類することができる。まず第一に、彼らが個人的な人的資源を利用することで、首長家の若手メンバーに接近を試みた点である。英国外交書簡が示すとおり、当時のサバーハ家の若いメンバーのなかには、同時期のサウジアラビアにおける「自由プリンス」のように、アラブ民族主義的な思想に共感を示すメンバーが少なからず存在した<sup>49</sup>。例えばハティープは、毎日時間をみつければ、サーリム首長の息子であり、後に第一四代首長（在位二〇〇六）に就任するサアド・アブドゥッラー（Sa'ad Abd Allah al-Salim al-Sabah）の事務所には必ず立ち寄り、彼と談笑する時間を設けていた<sup>50</sup>。そのため、サアドを含めた首長家の若手メンバーは、ハティープが組織する上述の団体に活動資金を提供するなど、ANMクウェートの活動に大きく貢献していた。このことは、首長家に対するアラブ民族主義の影響を危惧していたクウェート英国行政官と、とにより強く警戒させた<sup>51</sup>。

第二に、ハティープが一九五四年に組織した署名運動に始まる、一連の政治活動である。一九五〇年に首長位に就任したサーリムは、すでにいくつもの行政改革に着手していた。例えば彼は、一九五二年、地方行政、教育、厚生、そしてワクフの各管轄において、それまで権限を掌握していた首長家の諮問役を務める四つの議会を設立している。この議会には商人階層のみが参加し、一般の民衆は関与しなかったが、一九三八年の立法議会以降、初めて首長家以外のクウェート人が政策決定に関与したという点において、画期的な出来事であった。しかし商人階層によって構成された議会に対して、首長家の一部が非協力的であったため、議会は機能することがなかった<sup>52</sup>。

政治改革に対する首長家の保守的な姿勢を打破するために、ハティープを中心としたANMクウェートは、四つの議会を単一化したうえで、政治的に寛容なサーリム首長が議長に就任するべきであると主張し、この案に同意する商人階層や国内の諸団体から署名を集める。そして彼は、一九五四年半ば、サーリム首長に直接謁見する機会をえて、上述の署名を首長に提出する。その際ハティープは、一般民衆の政治参加を要求する、ANMクウェー

ト独自の政治改革案も一緒に手渡すことに成功している<sup>53</sup>。

サーリム首長は、ハティープや商人階層のこのような動きに対して、首長家の内部で数回にわたって協議を開催したうえで、首長家によってのみ構成される「高等執行委員会（al-Hay'at al-Tanfithiya al-'Ulya）」（一九五四年七月）や、首長家以外のメンバーを限定的に加えた「最高議会（al-Majlis al-'Alia）」（一九五五年一二月）を設立し、事態の鎮静化を試みる<sup>54</sup>。しかしハティープらは首長側の対応を不足とし、民衆の政治参加を求める抗議集会やデモを組織し、さらには政府を批判するピラを配布することで、首長家への圧力を継続した<sup>55</sup>。

ハティープらによるこのような継続的な活動をひとつの契機として、サーリム首長は五六名の民選議員によって構成される四つの議会の設立を決定し、一九五八年三月に選挙が実施された。この選挙では、選出された議員の多数が伝統的な商人階層の出自であったが、これまでは異なり、ハティープや、同じくANMクウェートのジャーシム・ガターミー（Jasim al-Qatami）などの政治および経済的な権力とは無縁であったクウェート人も、初めて公的な議論の場に参加する機会を獲得した<sup>56</sup>。

しかし、ANMクウェートの政治活動に不満を抱いていた最高議会の首長家の一部が、四つの民選議会を承認する見返りとして、ハティープとガターミーを含めた三名の当選議員の辞任を要求する。そのため議会は、代表者をサーリム首長のもとに派遣し、首長家の一部が議会の管轄に介入しているとの不満の意を伝えたいと、総辞職してしまう<sup>57</sup>。このように、ハティープらが要求していた民選議会の設立による一般民衆の政治参加は、首長家内部の保守的な勢力の介入によって、再度挫折を余儀なくされた。ではこの問題に対して、ハティープらANMクウェートはどのように取りくんだのだろうか。

## 六 商人階層との協力——クウェート連盟

ハティープは、ANMクウェートの活動を行うにあたり、商人階層との協力関係の不在を長く問題視していた。当時のハティープらの活動は、クウェート・クラブ委員会を構成する下位単位のクラブをとおり、クウェート社会の多様な階層と結ばれていた。しかし彼らの活動は、クウェート社会において伝統的に影響力を有していた商人階層を、十分に動員することができ

ないでいた。しかしハティープが述べるように、一九三八年の立法議会運動では、経済的に恵まれ、かつ体制や政策決定者に近い立場にいる商人階層が、大きな役割を果たしていた。ハティープは、当時のクウェートの一般民衆が、立法議会運動を首長家と商人階層とのあいだの権力闘争と理解し、一連の政治行動にほとんど関与しなかった点を、運動が失敗したひとつの要因として問題視している。そして今後クウェートにおいて民選議会を設立するために、一般の民衆と商人階層とのあいだの「溝」を埋める必要があり、そのためには両者を包括する「広域戦線 (Jabha Was'ia)」を構築し、首長家に圧力をかけなければならないと考えていた<sup>60</sup>。

また商人階層にとっても、ANMクウェートとの協力関係の構築は、自らの利益に適うことであった。とくに一九三八年の立法議会運動に参加した商人階層は、政治や経済的権限を独占する首長家に対して不満を有しており、ANMクウェートやクウェート・クラブ委員会の活動を、首長家に対する商人階層の政治的脆弱さを補うものであると考えていた<sup>61</sup>。

一九五八年六月の「クウェート連盟 (al-Rab'ia al-Kuwaytiya)」の創設は、ANMクウェートによる上述の問題意識と、商人階層による政治的な影響力の回復を望む声が合致したところに、まさに実現したと考えてよいだろう。ハティープ自身も述べているように、クウェート連盟は、商人階層をANMクウェートの活動に統合することで、階級横断的な運動を組織するためのプラットフォームとしての役割を期待されていたのである<sup>62</sup>。

クウェート連盟の設立宣言は、同連盟の活動の目的を、国内の諸問題について科学的に調査し、その適切な解決を考案したうえで、政策実行者や民衆がそれに取りくむことができるよう公表していくことと規定している。そしてその参加者として、全てのクウェート人がその資格を有していると宣言している<sup>63</sup>。この規定には、一般民衆の政治参加を求めるANMクウェートの主張が反映されており、階級横断的な政治活動を組織しようとする連盟の趣旨が明確に現れているといえよう。実際、ANMクウェートの機関紙である『夜明け (al-Fajr)』紙(一九五八年八月一日付)は、連盟の創設理由として「民衆の声が決定的」な時代において、「国家の防衛と国内問題の解決に参加することが自らの義務である」と考える、全ての忠誠あるクウェート人の見解を効果的に、そして明確に公表する」ためと述べている<sup>64</sup>。

ではクウェート連盟に参加したメンバーは、どのような人物であったのだろうか。その顔ぶれは相当数にのぼるが、一九六二年の制憲議会において、

ANMクウェートと協力関係を構築することとなる人物を中心に簡潔に紹介したい。まずは、連盟に参加した商人階層である。そのなかで最も重要な人物は、アブドゥッラティーフ・スナイヤーン・ガニム、アブドゥルアズィーズ・ハマド・サゲル、そしてアフマド・ザイド・サルハーンの三名である。彼らは、一九三八年の立法議会運動に国民会派や国民青年会派のメンバーとして関わっており、政治活動における実践経験を有していた。

また上述の商人階層とは一代若い世代にあたる商人として、ヤアクーブ・フマイディー (Ya'qub al-Humaydi)、スライマーン・ハリド・ムタワ (Sulayman Khalid al-Mutawa)、そしてアブドゥッラツザーク・ハリド・ザイド (Abd al-Razzāq Khalid al-Zayd) の三名をあげることができる。彼ら三名は商人階層の出自であるが、アラブ民族主義を信奉し、ハティープやガターミーとともにANMクウェートの主要メンバーとして活動していた<sup>65</sup>。有力な商人階層の出自ではないメンバーとして、ANMクウェートを率いる二名、つまりハティープとガターミーが参加している。後者については、クウェート連盟の執行委員長に就任した<sup>66</sup>。

クウェート連盟は、エジプトとシリアが、一九五八年二月に合併して設立したアラブ連合共和国に、クウェートが第三番目の加盟国として参加するようサリム首長に求めるなど、いくつかの「急進的」な活動を展開した。しかし彼らの活動は、一年にも満たずに終結してしまう。一九五九年二月、連盟はクウェート・クラブ委員会と連名で、アラブ連合共和国の建国一周年を記念する政治集会を開催した。しかし、その際ハティープとガターミーが首長家による権力独裁を「部族的統治 (hukm 'ashā'iri)」として批判したため、政府当局はクウェート連盟を解散してしまったのである<sup>67</sup>。

このように、クウェート連盟の活動期間は非常に短いものであった。しかしバールートが述べるとおり、この連盟の存在は、ANMクウェートと一九三八年議会運動の指導者とのあいだの「婚約」を実現したのであり、この活動をとおして築かれた商人階層との協力関係は、ハティープ自身も述べるように、一九六二年の制憲議会において、クウェート国憲法を制定する際に大きな役割を果たすこととなるのである<sup>68</sup>。

## 七 おわりに——一九六二年制憲議会

本稿では、クウェートのアラブ民族主義者アフマド・ハティープの政治活

動について、一九六二年の制憲議会直前までの期間を対象に整理した。そしてこの過程において、一般民衆の政治参加を求めるハティープの政治的態度が、権力を自らの手中に維持したい首長家とのあいだに、度重なる緊張を惹きさせてきたことについて明らかにした。また同時に、本稿は、ハティープがこの政治目的を達成するために、様々な出版媒体をおして自らの見解を表明してきたことについても言及した。彼は、湾岸地域出身者のなかで最も早期に博士号を取得した、いわゆる知識人の一人である。この事実を考慮にいれると、彼の政治認識は、湾岸地域において国民国家が構築されつつあるなか、この地域の一人が、その現実をどのように理解し、そしていかに対応しようとしたのかを示す、非常に貴重な資料として位置づけることができる。

ハティープは、その後、制憲議会に参加し、クウェートにおける議会制度の設立に大きく関わったほか、なおも残存する首長家優位の統治制度に対して批判的な政治家として、湾岸戦争後の第七期国民議会（一九九二～九六）まで活躍した。そして二〇一三年現在においても、彼は精力的な言論活動をおして、首長家による国家統治を批判し、一般民衆の真の政治参加を主張しつつづけている。本稿の議論に照らせば、半世紀以上にわたりクウェートの君主体制を批判しつつづけてきたハティープの思想的基盤は、彼の幼少時代の個人的体験や、レバノン時代の交友関係などによって醸成されたと推定することができよう。そしてクウェート帰国後にハティープが従事した一般民衆の政治参加を求める一連の活動は、彼のこのような思想が、政治的実践に転化した初期形態として評価することができる。このような理由から、制憲議会直前までのハティープの政治活動について整理した本稿の議論は、「クウェート・モデル」の制度設計における、アラブ民族主義勢力の役割と、その後の同国における議会政治の展開を再検討するうえでも、ひとつの意義を有していると考える。

では最後に、制憲議会に関する基本的な情報について説明したうえで、今後の展望について提示したい。

サーリム首長は、一九六一年八月二六日、制憲議会選挙に関する法制度を規定する委員会を設置し、同年二月三〇日、制憲議会の設立を宣言する。そして翌一九六二年一月六日に制憲議会選挙が実施され、二〇名の民選議員が誕生する。この選挙では、クウェート連盟に所属していたアブドゥッラティーフ・スナイヤーン・ガーニム、アブドゥルアズィーズ・ハマド・サグル、

アフマド・ハティープ、そしてヤアクープ・フマイディーが選出されている。

続けて一月一七日、一四名の閣僚によって構成される暫定内閣が発表される。この暫定内閣には、一名の首長家メンバーと、制憲議会に当選した三名の民選議員が入閣した。そして一九六二年一月二〇日、民選議員二〇名（うち閣僚兼任者三名）と、閣僚に就任した首長家一名の総計三一名によって、制憲議会が開催されることとなる<sup>67</sup>。クウェート連盟が、一九三八年の議会運動の指導者と、それよりも一世代ほど若いANMクウェートのメンバーを結びつける媒体であることを考慮にいれると、彼らが参加する制憲議会という場合は、憲法の制定によって首長家の政治・経済的権限に制限を加えること、そして民衆の政治参加を制度的に保障することを求める二つの世代が、クウェートのこれからの国家運営の方法を設計するため、協調して行動する場であると定義することができよう。

同議会は、一九六二年二月二五日の第三一回会合をもって、全ての議論を終結する。ハティープは、憲法原案を作成する憲法委員会には参加できなかったものの、一般民衆がより広範な政治的権利を獲得することができるよう、制憲議会本会において奮闘する。その過程において、彼は首長家のサアド・アブドゥッラーと度々衝突している。この点については、英国外交書簡も、制憲議会は「アフマド・ハティープに率いられた改革派と、サバーハ家の特別な地位を守るシャイフ・サアド・アブドゥッラーとのあいだに展開する対立」によって特徴づけられる、と本国に報告している<sup>68</sup>。

しかしながら、憲法を制定するこれら二つの場では、首長家とANMクウェートとのあいだにおける衝突のみが展開していたわけではない。制憲議会および憲法委員会の議事録を厳密に精査すると、むしろ実際には、両者のあいだにおいて商人階層が「仲介役」として機能しつつ、これら三つの政治主体が相互に影響しあい、立法権や行政権、そして政党結成の権利などの政治的条項をめぐる、激しく議論を展開していたことが判明した。クウェートの政治学者ナッジャールは、制憲議会議員は、当時、首長家と、「臣民(subjects)」にとつてかわる「市民(citizens)」とのあいだの関係を制度化する作業に従事していたことを、明確に意識していたと指摘する。そして制憲議会における議論の過程については、今後より綿密な分析が必要となると主張している<sup>69</sup>。この点については、本稿の「はじめに」で提示したクウェートの政治史に対する筆者の関心と引きつけて、稿を改めて論じることとしたい。



【付記】

本稿は、学術研究振興基金「小笹会」による研究成果の一部である。

【註】

- (1) 本稿におけるアラビア語転写は、一部の例外(サゲル、ジョルジュ、ガターミーなど)を除き、すべて大塚和夫他編(2002)『岩波イスラーム辞典』岩波書店に依拠する。
- (2) al-Shayḥī, 'A.A. (2009) *Tarḡīḥ al-Namūdhaj al-Dimūqrāfī*, Carnegie Endowment for International Peace.
- (3) 例えは国外的要因にすぎず、Luce, W. (1967) "Britain in the Persian Gulf," in *The Round Table*, Vol. 57, No.227 44-46; Hudson, M. C. (1977) *Arab Politics: the Search for Legitimacy*, Yale University Press など。国内的要因については Alshayji, A. K. (1988) *Democratization in Kuwait: The National Assembly as a Strategy for Political Survival*, Ph.D. Thesis, submitted to the University of Texas at Austin; Crystal, J. & al-Shayji, A. (1998) "The Pro-Democratic Agenda in Kuwait: Structures and Context," in Korany, B., Brynen, R., and Noble, P., eds. *Political Liberalization and Democratization in the Arab World*, Lynne Rienner; Almajjar, G. (2000) "The Challenges Facing Kuwaiti Democracy," in *Middle East Journal*, Vol. 54, No. 2; Rabi, U. (2000) "The Kuwaiti Royal Family in the Postliberation Period: Reinstitutionalizing the 'First among Equals' System in Kuwait," in Kostiner, J., ed. *Middle East Monarchies: the Challenge of Modernity*, Lynne Rienner 24-48 研究を指摘するところが多い。
- (4) Jan 'Iya al-Shaḥfāfiya al-Kuwayfiya. (2008) *Mahādīr Jīmā'āt Lajna al-Dustūr wa al-Majlis al-Ta'sīsī*.
- (5) なお、制憲議会におけるハティープらアラブ民族主義者達の役割については Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art, Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, 1<sup>st</sup> December 2012 において既に発表した。この内容については、今後論文としてまとめる予定である。
- (6) 本稿における湾岸アラブ諸国とは、湾岸協力会議 (Gulf Cooperation Council: GCC) を構成するアラブ首長国連邦、オマーン、カタール、クウェート、サウジアラビア、そしてパナレーンの六カ国を指す。
- (7) Longva, A. N. (2005) "Neither Autocracy nor Democracy but Ethnocracy: Citizens, Expatriates, and the Socio-Political Regime in Kuwait," in Dresch, P. and Piscatori, J., eds. *Monarchies and Nations - Globalisation and Identity in the Arab States of the Gulf*, IB.

Tauris.

- (8) ハティープの自伝は al-Kharḥ, A. (2007) *al-Kuwayt min al-Jmā'a ilā al-Dawla*, al-Markaz al-Thaqāfī al-'Arabīya' または英国外交書簡集は 'Records of Kuwait'シリーズ (Rush, A. de L., ed. (1989) *Records of Kuwait: 1899-1961*, (Vol.1-8), Archive Editions 44-45 Burdett, A., ed. (1997) *Records of Kuwait: 1961-1965*, (Vol.1-6), Archive Edition) を利用した。なお後者については、以下 ROK を示す。
- (9) シャルク地区には、首長家であるサバーハ家をはじめ、真珠採取業に従事し、ペルシャ湾を中心に活動する商人が集中していた。またキブラ地区には、造船および貿易業に従事し、東アフリカからインド亜大陸、そして欧州まで交易にでる商人が居住していた。al-Shamlan, S. M. (1978) *Tarīkh al-Chawṣ 'alā al-Lu'lu' fī al-Kuwayt wa al-Kharḥ al-'Arabī: al-Juz' al-Thānī: al-Ghawṣ 'alā al-Lu'lu' fī al-Kuwayt*, Matba'a Hukūma al-Kuwayt, pp. 151-86.
- (10) al-'Aydarūs, M. H. (2002) *Tarīkh al-Kuwayt al-Hadīth wa al-Mu'tasir*, Dar al-Kitaḥ al-Hadīth, pp. 123-4 44-45 al-Kharḥ (2007) p. 28. 石油経済以前の両階層の経済格差は著しく、商人階層の搾取を嘆く労働者による民謡が数多く残されている。
- (11) Khalaf, S. (2008) "The Nationalization of Culture: Kuwait's Invention of a Pearl-Diving Heritage," in Alsharekh, A. and Springboing, R., eds. *Popular Culture and Political Identity in the Arab Gulf States*, SAQI, pp. 66-8.
- (12) クウェート近郊の遊牧民は、主に春にクウェートの町に立ち寄り、毛皮、飼料、乳製品を売り、生活必需品を購入していた。al-'Aydarūs (2002) pp. 123-4.
- (13) al-Shamlan, S. M. (1970) *al-'Alī'ab al-Sha'bīya al-Kuwayfiya: Wasf-hā, Adawā-hā, wa Mā Yata'allaq bi-hā: al-Juz' al-Awwal*, Matba'a Maqhawī, pp. 43-5 44-45 al-Kharḥ (2007) p. 32.
- (14) al-Kharḥ (2007) pp. 23-4, 27-8.
- (15) Kazziha, W. W. (1975) *Revolutionary Transformation in the Arab World: Habash and His Comrades from Nationalism to Marxism*, Charles Knight, p. 18 44-45 ROK (1997) Vol.5, p. 75.
- (16) al-Kharḥ (2007) pp. 24-5.
- (17) ハティープの戦いとは、現在はイラク領にあるズバイル (al-Zubayr) を拠点とするムンタフィク (al-Muntafiq) 一族と、サバーハ家とのあいだに発生した戦闘である。ハティープの父と祖父は、同一族のサアドゥーン (al-Sa'adūn) 家によって捕虜とされてしまった。この戦闘は、敗れたサバーハ家がクウェート内の増税を断行し、後に商人階層とのあいだの確執を決定的なものとする、重要な出来事である。al-Shamlan (1978) pp. 67-83.
- (18) al-Kharḥ (2007) pp. 24-6.

- (18) 文教委員会とは、クウェートにおける教育を管轄することを目的に、一九三六年に設立された審議会である。サバーハ家から選出される議長を筆頭に、商人階層から選出された一二名の委員によって構成されていた。同委員会は、クウェートの関税収入の〇.五%を毎年教育費にあてることを決定したうえで、クウェート内における公教育の普及に努め、数多くの学校を設立した。Markaz al-Buḥāth wa al-Dīrāsāt al-Kuwayṭīya. (2002) *Tārīkh al-Ta'īm fī Dawlā al-Kuwayṭ: Dirāsa al-Tawḥīdīya [al-Muqallad al-Thamī]*. Tamfīdh Matabi' al-Malik. pp. 11-2, 152, 154.
- (19) al-Khaṭīb (2007) pp. 24-6, 35-6.
- (20) あるパレスチナ教師は、授業をとおして火薬の製造方法を子どもたちに教授していたという。ハティープによれば、そのような授業の内容は、当時のパレスチナにおける政治情勢を反映していたという。al-Khaṭīb (2007) pp. 28-9, 38-9.
- (21) al-Khaṭīb (2007) pp. 34-5.
- (22) Ismael, J. S. (1982) *Kuwait: Social Change in Historical Perspective*. Syracuse University Press, pp. 71-3; al-Mudayris, F. A. (1999) *Malāmīh Awwalīya hawla Nash'a al-Tajammu'ī wa al-Tanzīmī al-Syāsīya fī al-Kuwayṭ (1938-1975)*, Dār Qurāṣ li al-Nashar, pp. 7-8; Abu-Hakima, A. M. (1983) *The Modern History of Kuwait 1750-1965*, p. 156. 例えば、関税などによって構成される、一九三八年度のクウェートの全歳入一六万三〇〇〇ルビーのうち、首長家の取り分はおよそ二〇万ルビーであったという。ROK(1997)Vol.3, 在々英国大使館から本国への書簡(一九六三年六月一六日付) p. 103.
- (23) al-Mudayris (1999) pp. 6-7.
- (24) 国民会議派は、当時のイラクにおける立憲君主制度を、理想の政治制度とみなして「*نظام*」al-Khamis, M. (2002) *Mas'ra al-Dīmuqrāṭīya fī al-Kuwayṭ 1938*, Dār al-Hadāth li al-Shīfā wa al-Khidmāt al-'Ilmīya, pp. 61-4.
- (25) al-Mudayris (1999) pp. 7-8.
- (26) Ismael (1982) p. 73; al-Mudayris (1999) p. 8.
- (27) Ismael (1982) pp. 73-7.
- (28) Barūt, M. J. (1997) *Haraka al-Qawmīya al-'Arab, al-Nash'a, al-Tajawwur, al-Mas'ir, al-Markaz al-'Arabī li al-Dīrāsāt al-Isrāfīya*, p. 130; al-Mudayris (1999) pp. 9-19. べつにROK (1997) Vol.5, 在々英国大使館から本国への書簡(一九六四年一月二日付) p. 522.
- (29) Dayn, A. A. (2005) *al-Dīmuqrāṭīya fī al-Kuwayṭ: Mas'ir-hā, Wāqī-hā, Tahaddīyāt-hā, Aḥqāq-hā*, Dār Qurāṣ li al-Nashar, p. 44. この期間、首長家のメンバーはその政治的権力を無制限に行使した。ドゥッラ地区のハティープ家の土地は、立法議会が解散された後、首長家のメンバーによって強制的に買収され、彼らは町の別の地区に
- 移動することを余儀なくされた。al-Khaṭīb (2007) pp. 32-3.
- (30) al-Khaṭīb (2007) p. 51. ハティープは、『開拓者 (al-Rā'id)』誌(一九五三年二月二五日発売第九号)とのインタビューにおいて、彼が医学部を志望した理由について、医師の数が十分ではないという、当時のクウェート社会が直面していた問題に取りくむためである、と答えている。Markaz al-Buḥāth wa al-Dīrāsāt al-Kuwayṭīya. (1999) *al-Rā'id al-Muqallad al-Awwal, al-Qism al-Thamī*, p. 969. (再版。初版は「教師クラブ (Nādī al-Mu'allimīn)」が編集。なお、彼は一九四四年の秋学期よりAUBの医学部に入学し、最初の四年間は基礎医学の学習に、そして次の四年間は博士号の取得に従事している。専門は総合診療および一般外科。al-Shahāb, Y. (1984) "Rijāl fī Tārīkh al-Kuwayṭ," in *al-Qabas*, March 22.
- (31) al-Khaṭīb (2007) pp. 54, 56-67. アドサーニーは、レバノン時代のハティープの同級生で、かつ親友でもあった商人階層出身のマルズーク・ファハド・マルズーク (Marzūq Fahd al-Marzūq) の叔父であった。
- (32) 筆者によるハティープ氏への聞き取り調査(二〇一二年二月一日)。
- (33) 「絆」は、アラブ人学生の識字率を上げるために、一九一八年にシイルトで設立された非政治団体である。この活動は、大戦中に一時停止していたものの、戦後ズライクの主導で活動を再開したという。Kazhha (1975) p. 18; al-Khaṭīb (2007) p. 71. なお協会名である「固き絆」は、パン・イスラーム主義の思想家であるアフガーニー (Jamāl al-Dīn al-Afghānī) とその弟子ムハンマド・アブドゥッ (Muhammad 'Abdūh) が、一八八四年にパリで刊行した「固き絆」誌を参考にした名称であると推定される。
- (34) なお「絆」におけるズライクの役割については、al-'Azma, A. (2003) *Qusṭanīn Zurayq: 'Arabī li al-Qum al-'Ishrīn*, Mu'assasa al-Dīrāsāt al-Fīlasūfīya が詳し。
- (35) Kazhha (1975) p. 19; al-Khaṭīb (2007) pp. 67-73.
- (36) この点については、ジョルジュ・ハバシユの発言からも明らかである。彼によれば、「絆」はナクバ以降、パレスチナをめぐる様々な問題を議論する場へと変貌し、急速に政治化が進んだという。やがてハバシユとビンディーの二人は、武装組織「アラブ殉教者旅団 (Katā'ib al-Fīdā' al-'Arabī)」を編成し、ナクバの責任者であるアラブ諸国の要人暗殺計画を実施しはじめたが、これらの点については、ハバシユとの会談集 Matar, F. (2008) *Hākīm al-Thawra: Sira Juy' Habash wa Nādī-hu*, Dār al-Nahār li al-Nashar, pp. 47-67 が詳し。
- (37) al-Khaṭīb (2007) p. 72.
- (38) 「絆」における活動が、政治活動に特化したANNと再編される過程について、al-Samrā'i, A. S. (1986) "Haraka al-Qawmīya al-'Arab wa Dawr-hā fī al-Wāy al-Qawmī," in *Tajawwur al-Fīl al-Qawmī al-'Arabī: Buḥāth wa Muṭaqashshāt al-Nadwa*

- al-Fikriyya allatī Nazẓama-hā*, Markaz Dirāsāt al-Wahda al-'Arabiyyaを参照のこと。
- (39) Kazziha (1975) pp. 21-2; al-Khatīb (2007) p. 73.
- (40) al-Khatīb (2007) pp. 73-4, 77-83. ハティープによれば、このデモは、米国の中東政策を批判することを目的として、一九五二年に実施されたものであるという。al-Shahbāb (1984).
- (41) ハバシユを中心としたANMの初代主要メンバーは、一九五二年までにAUBを卒業し、それぞれ次の活動の地へと移っていく。Kazziha (1975) p. 21, 25-7. ナセリズムやマルクスレーニン主義への思想的接近、そしてそれに伴う組織の分裂を含めたその後のANMについては、al-Samā'ī (1986) および Bārūt (1997) を参照のこと。
- (42) 筆者によるハティープ氏への聞きとり調査(二〇一二年二月一日)。
- (43) al-Khatīb (2007) pp. 66-7.
- (44) サリム首長がリベラルな政治政策をとった理由には諸説ある。例えばそのなかには、彼が一九三八年の立法議会において議長として商人とともに活動したことや、その際に議員として選出され、かつクウェートの教育制度の近代化に大きく貢献したユースフ・イブン・イーサー・ギナーイーのもとで、幼年時代に学業を積んだ経験があるなど、いくつかの要因が指摘されている。Dayn, A. A. (1999) *Wīlāda Dustūr al-Kuwayt: Kayfa Tammat Sīyāgha Dustūr Dawla al-Kuwayt wa Munāqasha-hu fī al-Majlis al-Ta'sīf wa Lajna al-Dustūr fī al-Jīm 1962*, Dar Qurtās li al-Nashar, p. 6; al-Mudayris (1999) pp. 15-6; al-Khatīb (2007) p. 100. また現代のクウェートにおいて「憲法の父」とよばれるサリム首長に対する評価は、同国の研究者や識者のあいだにおいても非常に高い。例えばクウェート大学政治学部のナッジャール (Ḥanīm al-Najār) は、サリム首長の治世が一五年間と比較的長く継続したことが、クウェートの議会制度の定着に大きく貢献したと評価している。Alhajjar (2000) p. 258. また英国行政官としてクウェートに長期滞在し、首長家と親密な関係を築いたジャクソン (G. N. Jackson) も、クウェートに近代的であり民主的な統治機構を導入することにおいて、サリム首長ほどこの役に適した人物はいなかったと高い評価を与えている。ROK (1997) Vol.5, 在ク英国大使館から本国への書簡(一九六四年一月二日付) p. 522.
- (45) なおハティープは、国立病院勤務二年目に、熱帯病の治療方法について学ぶため、英国に六ヶ月間留学している。その後、一九五六年に国立病院を辞職し、個人診療所を開設した。al-Shahbāb (1984).
- (46) 一九五〇年代前半は、エジプトやレバノンで高等教育を受け、政治化したクウェート人留学生が帰国しはじめた時期にあたる。Hajjawi, N. D. B. H. (2003) *Ta'wīr al-Fikr al-Nāsīf 'alā al-Khalīf al-'Arabī 1952-1971*, Markaz Dirāsāt al-Wahda al-'Arabiyya, pp. 153-5. のことは、サバーハ家の一族支配に対して批判的な人々を動員する基盤が、当時のクウェート社会において醸成されていたことを意味する。なお具体的な団体には「アハリ・クラブ (al-Nādī al-Ahī)」、「民族文化クラブ (al-Nādī al-Thaqafī al-Qawmī)」、「大卒者クラブ (Nādī al-Kharījīyān)」そして「教師クラブ」などがある。ハティープは、それら団体が発行する「信仰の響き (Ṣūṭa al-Imān)」、「信仰 (al-Imān)」、「夜明け (al-Fajr)」、「開拓者」そして「前衛の声 (Ṣawr al-Ta'wī)」などの刊行物の編集・執筆活動をおし、クウェート内にアラブ民族主義の思想を広げた。Kazziha (1975) pp. 33-4; al-Mudayris (1999) p. 16, 19; al-Khatīb (2007) pp. 100-1, 117-21. またハティープは、ANMクウェートの活動をおし「労働者クラブ (Nādī al-'Ummal)」も設立した。このクラブに参加した何名かの労働者は、後にクウェートにおける労働組合の設立に大きな役割を果たすことになる。Rabi', M. M. (2005) *al-Nizām al-Siyāsī fī Dawla al-Kuwayt*, D. N., p. 106.
- (47) al-Mudayris (1999) pp. 32-3, 36. なお同委員会は、一九五八年より「クウェート・クラブ連合 (Itihād al-Andīya al-Kuwaytīya)」として発展解消する。
- (48) al-Khatīb (2007) p. 210.
- (49) ROK (1989) Vol.3, 在ク英国行政官から本国への書簡(一九五五年八月一日付) p. 171. および本国から在ク行政官への書簡(一九五八年二月二日付) pp. 249.
- (50) 二人の交流は、ハティープの英国留学時代に遡る。サリム首長の息子であるサアドは、同時期に英国のヘンドン警察大学に留学しており、彼らはほぼ毎日顔を合わせ親交を深めていた。al-Khatīb (2007) pp. 105-7.
- (51) ROK (1989) Vol.3, 在ク英国行政官から在バハレーン英国行政官への書簡(一九五五年六月七日付) pp. 165-6. および在ク英国行政官から本国への書簡(一九五五年八月一日付) p. 171. そしてal-Khatīb (2007) p. 108, 129.
- (52) サアドに代表される首長家の若手メンバーとは異なり、その一つうえの世代は、サリム首長が主導する政治改革に反対していた。例えば、首長家においてサリム首長に次ぐ権威を有するサリムの異母兄弟ファアド・サリム (Fahd al-Salīm) と、サリム首長の叔父であり、第七代首長ムバラク・サバーハ (Mubārak al-Sabāh) (在位一八九六―一九一五)の息子であるアブドゥッラー・ムバラク (ʿAbd Allāh al-Mubārak) の二人は、行政改革に反対する尖兵であった。両者がサリム首長の政治改革において最も大きな障害となっていたことについては、当時の英国行政官が両者を「自己利益の追求者」、または「独裁政治の最後の防衛者」と形容していることから想定することができる。ROK (1989) Vol.3, p. 64. および在ク英国行政官から本国への書簡(一九五五年八月一日付) p. 171. そしてROK (1997) Vol.2, 在ク英国大使館から本国への書簡(一九六二年一

月一日付) p. 86.

(53) その際ハティープは、少年時代に自らに学業継続の機会を与えてくれたユースフ・イブン・イーサー・ギナーイーから署名を獲得する。ギナーイーは、一九三八年の立法議会において議員として活躍しており、国内の重要問題について首長に助言するなど、首長や商人階層からの信頼が厚い人物であった。ハティープは、はじめにギナーイーから署名を獲得できたことが、その他の商人から署名を獲得するにあたり、大きく貢献したと述べている。al-Khatib (2007) pp. 172-80.

(54) 英国外交書簡によれば、首長家は、サバーハ家の権限を低下させるこのような要求に対し、強く反発したという。しかし一方で、何名かのメンバーは、ANMクウェートが単独で提出した彼ら独自の政治的要求を、真剣に受けとめたという(この点については明記されていないが、恐らくサアドを中心とした若手メンバーであろう)。またサーリム首長に召喚されたギナーイーは、その他の商人階層を率いてファハドと面会し、議会活動が失敗した責任を彼に認めさせたいうえで、サーリム首長に対しては、首長として一族のメンバーの行動を十分に統制していないと、その弱さを激しく咎めたという。ROK (1989) Vol.3. 在ク英国行政官から本国への書簡(一九五四年七月二六日付) pp. 128-30.

(55) ROK (1989) Vol.3. 在ク英国行政官から本国への書簡(一九五四年七月二六日および一九五六年七月二二日付) pp. 128-30, 191-2; al-Mudayris (1999) pp. 17-9.

(56) ガターミー一族は、石油経済以前は船乗り業を営む有力な家系であったが、当時のジャーシム・ガターミーとその一家が置かれていた社会的地位は、その他の商人階層と比較して低いものであったという。ROK (1997) Vol.6, pp. 71-2.

(57) al-Mudayris (1999) pp. 17-9; al-Khatib (2007) pp. 181-6.

(58) al-Khatib (2007) pp. 66-7, 125, 149. またハティープは、一九三八年の立法議会運動がシリア派住民に対してとった差別的な政策が、現代まで続くクウェート社会の宗派対立に大きな禍根を残していると指摘している。al-Khatib (2007) p. 34.

(59) Barūt (1997) p. 131. またバールートは、一九三八年の立法議会運動に参加した商人階層は、ANMクウェートの活動を自らの長年の政治目的に沿うものであるとみなしながらも、その活動に直接関与することは困難であったと指摘する。Barūt (1997) p. 131, 479. この点についてハティープは、商人階層は政治、経済、そして社会的地位が高いために、伝統的に首長家と密接な関係を築いており、首長家の不要な警戒心を高めないうえにも、商人らのANMクウェートへの直接参加は避ける必要があったと説明している。al-Khatib (2007) p. 125.

(60) al-Khatib (2007) p. 125. また英国外交書簡は、クウェート連盟は、ANMクウェートの影響を受けた大卒者クラブの指導陣によって創設されたと示しており、その

活動の目的として、単一議会の設置と一般民衆の政治参加について、首長家に對して再度主張する意図があったと説明している。ROK (1989) Vol.3. 在ク英国行政官から本国への書簡(一九五八年八月二七日付) pp. 286-7. 英国行政官によるこの推定は、首長家の圧力によって、一九五八年三月に四つの民選議会が解散してしまつたという時局を考慮にいれると、ほぼ事実在即していると考えてよい。つまり絶対的権力を自らの手中に維持したい首長家に対し、階級横断的な政治運動を組織することで、ハティープらは、再度民選議会設立のための圧力をかけようとしていたと推測することができるのである。

(61) al-Mudayris (1999).

(62) ROK (1989) Vol.3. 在ク英国行政官から本国への書簡に記載された、同紙の英文翻訳記事(一九五八年八月二七日付) pp. 288-9.

(63) al-Mudayris (1999) p. 21. フマイデーは、国内で最大の羊輸入会社を営み、ハティープとの関係が非常に近い人物である。彼の姉妹はジャーシム・ガターミーと結婚している。ムタツワも国内の有力商人階層の出自であり、エジプト留学経験者である。有力な商人一族の出身であることが関係してか、彼は首長家のアブドゥッラー・ムバラクと非常に親密な関係を築いている。ハーリド・ザイドは、クウェート石油公社の経営理事やクウェート国営銀行の総裁代理を務め、さらには他の民間企業の経営にも従事する大商人である。また彼は、ANMクウェートの論説紙『前衛(al-Fatwa)』のオーナーでもあった。ROK (1997) Vol.6, p. 70, 73, 76.

(64) al-Mudayris (1999) pp. 37-8.

(65) Barūt (1997) p. 132, 479; al-Mudayris (1999) p. 39; al-Khatib (2007) pp. 191-2.

(66) Barūt (1997) p. 131; al-Khatib (2007) p. 125.

(67) al-Haydar, F. A. 'U. (1995) *Wahā'iq al-Harakat al-Dimuqrāṭiyya al-Siyāsīya fi al-Kuwayt min 1921 ḥatā 1992*. Dhāt al-Salasil, pp. 27-41.

(68) ROK (1997) Vol.2. 在ク英国行政官から本国への書簡(一九六二年六月二二日付) p. 7.

(69) Almajjar (2000) p. 244.